

2013年(平成25年)5月9日 木曜日 (12)

スズフリクラゲ



△
クラゲ芽で子孫
を増やすスズフ
リクラゲ (高知
県産)

スズフリクラゲは小型種で傘の縁に生涯2本の触手しか持たない。南日本の太平洋岸でわずかに確認されているだけで、田辺湾で採集できる機会には少ない。バランスよく向かい合った

久保田 信

96



これらの触手のほぼ全体にわたって、多数の柄が伸び出し、その先端には刺胞が複数装填(そつてん)されている。この刺胞囊(のう)を一斉に振動させる行動を取ることがある。その形と動きから文字通り「鈴振り」という和名が付けられた。もちろん、触手がすっかり収縮すると、このような行動はよく見えなくなる。

触手基部の膨らみである触手瘤(りゅう)のすぐ上の外傘には、赤い眼点が1個ある。本種を近縁種から分ける指標(メルクマール)となっている。赤い眼点

クラゲの仲間の一大特徴となっている。恐らく外敵よけ、防御のための武装であると思われる。

本種のもう一つのメルクマールは、このクラゲが未成熟の時に、分身を多数つくることである。傘の中央にある胃袋の表面に、鈴なりにクラゲ芽を出芽する。画像でその様子が分かる。大海でより多くの子孫を残すべく、クラゲでは珍しい無性生殖を起こすのである。

フラスコ状の口柄に生殖巣ができた成体は、なかなか野外からは採取されない。成熟クラゲの傘の大きさは、高さも直径も数センチほどである。もちろん、雌雄異体で、受精卵が海中でつくられ、それが海底暮らしをする若いポリプとなる。しかし、いまだポリプの姿もすみかも不明なままである。近縁種ではイシサンゴなどに共生している群体性のものが知られているので、本種も特殊な生活を送っているのかもしれない。

(京都大学准教授)